

## 〈スタンダード＝クラブ〉余話：ポール・レオトー のアドルフ・ポープ宛未刊書簡

高木, 信宏  
九州大学大学院人文科学研究院准教授

<https://doi.org/10.15017/18943>

---

出版情報：Stella. 29, pp.59-66, 2010-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン：  
権利関係：

## 〈スタンダール＝クラブ〉余話

——ポール・レオトーのアドルフ・ポープ宛未刊書簡——

高 木 信 宏

かつてスタンダール自ら予言したとおり<sup>1)</sup>、彼の文学的名声が高まったのは1880年以後のことである。もちろんその陰には、遺稿や書簡、蔵書等の散逸を防ぐとともに、ミシェル・レヴィ版全集の刊行（1853-55年）に心血を注いだ作家の従弟ロマン・コロンの献身があった。とはいえ、1858年にコロンが他界した後、グルノーブルの高等学校で教鞭を執るかたわら、市の図書館に眠っていた手稿類を発見し、『日記』『ラミエル』『アンリ・ブリュラルの生涯』など未刊行テキストの出版に尽力したポーランド系のスイス人カジミール・ストリヤンスキーによる多大の貢献がなかったならば、スタンダールの声価が定まる時期は予言よりもずいぶんと遅れたのではないだろうか<sup>2)</sup>。

再評価の機運が熟した1890年、パリ在住のスタンダール愛好家たちの強い要望に応じて居を首都に移したストリヤンスキーの周囲には、ポール・ギーユマンやレオン・ベリュグーなど同好の士が集い、〈スタンダール＝クラブ〉という伝説誕生の母体となるグループが形成された。この緩やかな結びつきによる私的な交際が文壇の耳目を引く契機となったのは、1904年にストリヤンスキーがメルキュール・ド・フランス社から上梓した著書『スタンダール＝クラブの夕べ』の題名そのものとベリュグーの筆になる序文であった。これ以降、〈スタンダール＝クラブ〉は、あたかも作家の熱烈な信奉者からなる秘密結社のごとく喧伝されるいっぽうで、その活動の真相は謎につつまれたまま1920年代まで存在の有無がとり沙汰されたのである<sup>3)</sup>。おそらくは組織としての実体はなかったものの、1912年にストリヤンスキーが没した後も依然〈Stendhalisme<sup>4)</sup>〉で結ばれた仲間たちは、新たにレミ・ド・グールモンを精神的支柱に選び出し、彼らの偶像の韜晦に倣って世間の目を欺きつつ、各人がそれぞれに交誼を深めていったのであろう。

かかる交流の一端を伝える史料として本稿がとりあげるのは、1914年3月にポール・レオトーがアドルフ・ポープに宛てた1通の未刊書簡である。その具体的な内容の検討に入る前に、まずはベル・エポック期のパリに咲いた「巧みなフィクション」<sup>5)</sup>の主要メンバーに数えられる、彼らふたりの間柄についてごく手短かに概観しておこう。

前者にかんしては贅言を要しまい。虚飾を排した赤裸々な回想録や日記に自らの文学的領域を見いだしたレオトーは、1902年に自伝的著作『ル・プティ・タミ』によって文壇にデビュー後、『イン・メモリアル』(1905年)、『性愛』(1906年)といった小品やモーリス・ボワサールの筆名による劇評や短文を『メルキュール・ド・フランス』誌等に寄稿して好評を博したが、なによりも20世紀のモラリストという後世の評言を決定づけたのは、1893年にはじまる畢生の大作『文学日記』である。ところで、若き日にレオトーの関心をマラルメやユイスマンスら象徴派の詩や小説から引き離し、エゴチスムの文学に向けさせたのが、ほかならぬストリヤンスキーの手により1888年に公になったスタンダールの『日記』であり、1890年公開の『アンリ・ブリュラルの生涯』であった。この邂逅はまたレオトーがスタンダール熱に浮かされるきっかけにもなったが、居室に作家の複製肖像画を飾るほどの心酔もやがて歳月が流れるにつれて衰微し、晩年にはその熱情もほとんど冷めてしまったようだ<sup>6)</sup>。

かたやアドルフ・ポープのほうは、一般にはあまり馴染みのない人物であろう。1854年にシャンパーニュ地方トロアに生まれたポープは、祖父の書架に見つけた『赤と黒』に啓示を受けた15の歳から自らの人生をスタンダールに捧げた才物である<sup>7)</sup>。1890年に居をパリに定めたポープは、翌年ジャン・ド・ミッティを介して知遇をえたストリヤンスキーに導かれて本格的な研究の道に入る。1904年に最初の成果『スタンダール作品史』を上梓した後、新聞や文芸誌に精力的に寄稿を続けるかたわら、1908年には3巻から成るスタンダールの書簡集をシャルル・ボス書店から刊行する。ミシェル・レヴィ版のそれが入手難となって久しいなか、ポール＝アルチュール・シェラミーの協力をえて<sup>8)</sup>、未刊の手紙を数多く活字におこしたポープ編纂書簡集の反響はすこぶる大きかった。そして1914年には、既発表の論文群に数篇の書き下ろしをくわえた集大成『スタンダールの文学生活』を、シャンピオン版『スタンダール全集』の別巻として世に送り出し、わずか10数年にして築きあげた業績への評価を不動のものとし

たのだった。エドゥアール・シャンピオンが1914年に配布した〈スタンダール＝クラブ〉の潇洒なパンフレットに、ポーブの肩書が「文書係兼会計幹事」と刷られているのは<sup>9)</sup>、むろん保険会社の会計係長という彼の職業にちなんだ悪戯もあるが、「文書係」のほうは、ほかの誰にもまして一次資料の収集と考証にあけくれた彼の研究スタイルに由来しているのだろう。モンマルトルの丘の中腹、スタンダールの永眠する墓地へとつづくアベス通りに面したポーブの住まいには、初版本や肖像画、書簡など貴重なコレクションの数々が博物館さながら蔵されていたらしい。作家への終生変わらぬひたむきな敬愛において比肩する者のいないアドルフ・ポーブは、まさにヴィクトル・デル・リットをして「ロマン・コロンの真の精神的兄弟」と言わしめたほど<sup>10)</sup>、20世紀初頭におけるスタンダール研究の基盤構築に寄与したのである。ポーブの没後、墓標にはただ一語「Stendhalien」とだけ刻まれていたという<sup>11)</sup>。

ポーブとレオトーの交際が始まった時期については、1905年よりも前には遡るまい。現在までに確認されているレオトーのポーブ宛書簡——マリー・ドルモア編纂による『書簡全集』所収の21通と、デル・リットが『スタンダール・クラブ』誌上で公表してきた未刊21通——全42通のうち、日付が最も若いのは1905年5月3日付の書状である。このなかでレオトーは前年にデュジャリック書店から出版されたばかりの『スタンダール作品史』が含む書誌情報の誤りを慇懃に手厳しく指摘しており<sup>12)</sup>、とても面識があったとは思えない。『文学日記』においてもポーブの名が登場するのは1905年以降である。興味深いことに同年9月19日付の日記には、ポーブをストリヤンスキーのでっち上げた架空の人物だと思い込んでいたと、レオトーがグールモンに話して聞かせたことが記されている<sup>13)</sup>。しかもそう思い違いをした理由のひとつとして、ポーブを「ストリヤンスキーの発明」と紹介した『スタンダール＝クラブのタベ』のペリュゲーによる序文が挙げられているのだ。同書の刊出が1904年の年の瀬（奥付には1905年）である事実を踏まえれば、レオトーが己の錯誤に気づき、ポーブとの接触を図ったのは1905年になってからとしか考えられまい。後年〈スタンダール＝クラブ〉の設立者に数えられたりもするレオトーであるが<sup>14)</sup>、1905年当初はまだストリヤンスキーだけでなく<sup>15)</sup>、ポーブとも面識がなかったのだ。レオトーが『レルミターージュ』誌1905年3月15日号に寄稿した短評「ル・スタンダール＝クラブ」は、いわば部外者として執筆されたのである。

文通を介してポープと次第に打ち解けたレオトーは、同時代文学の動向すら眼中にないスタンダールへの傾倒ぶり——はじめポープはゲールモンですらスタンダール関連論文の著者としてしか認識していなかった——になかば呆れながらも<sup>16)</sup>、『レルミタージュ』誌に新コラム「クロニック・スタンダリアン」を準備していたゲールモンに彼を寄稿者として推薦する。ゲールモンと連れ立ってレオトーが初めてポープ邸を訪れた1906年1月21日を境に、彼らの交際は親密さの度合いを増しはじめ、レオトーの書簡や日記にポープ夫人と子供らを変えて家族ぐるみでつき合うさまが窺えるようになる。

だが、レオトーがポープに胸襟を開くのは1909年に入ってからであろう。この年の7月11日、レオトーはポープに手紙で初めて自らの動物愛について打ち明けた。細やかな長い説明のあと、彼はこう結んでいる——「世の人びとはこれから知り合いになる人物のことを話題にすると、〈そのかたの外套は私に似合うかしら〉と訊いたものですが、私はといえば〈その人は動物が好きでしょうか〉と尋ねます。これこそが私の親近感の出発点なのです」<sup>17)</sup>。街を彷徨う哀れな捨て犬や野良猫に家族同然の愛情を抱くレオトーの逸話は周知であろう。ようやくレオトーはポープとその夫人に心を開いたのであり、この後レオトーの手紙に迷子犬の対処法といった話題が時おり混じることになる<sup>18)</sup>。

こうして芽生えた友情であったが、しかし1913年に起こったある出来事が災いし、ついには無惨にも萎れてしまう。事の発端は、1911年末にポープがレオトーの短文「ル・スタンダール＝クラブ」を、準備中の自著『スタンダールの文学生活』に収載させてくれるよう依頼したことであった。この一文の出来栄を密かに自負していたレオトーは<sup>19)</sup>、改稿を条件に快諾し、翌年の3月29日にはポープに原稿を渡している<sup>20)</sup>。そればかりか、レオトーはなかなか出版社が見つけれない友人のため、メルキユール・ド・フランス社の編集長アルフレッド・ヴァレットへの口利きを買ってでて<sup>21)</sup>。

それほどポープの申し出を歓んでいたレオトーだっただけに、企画が流れたときのその心中は察して余りある——「なんと酷いことを私にお書きになったのでしょうか。ご高書と一緒に小論「ル・スタンダール＝クラブ」が日の目を見、名声が頂点に達するのを当てにしていたこの私に。よろしければ、この輝かしい文学の小品をご返送ください。それにふさわしい場所をきつと反古のなかに見いだすでしょうから」<sup>22)</sup>。この1913年2月8日付の書簡に続き、2月11日に

もレオトーは苛立ちを抑えつつ原稿の返送をポーブに責付いている<sup>23)</sup>。収録を見送った経緯を告げるポーブの手紙が未確認であり、またレオトーの日記もこの件にかんして沈黙しているため、事の真相については推測するよりほかないが<sup>24)</sup>、レオトーにとり不愉快きわまる出来事が後々までずっと尾を引いたことは、これ以後彼の音信が途絶えがちになり、また『文学日記』にもポーブについての言及がほとんどなくなる事態に窺い知れよう<sup>25)</sup>。ちなみにドルモアは、ポーブから返送された原稿がその後は行方知れずである旨を注記している<sup>26)</sup>。

1年が過ぎ、問題の本がレオトーの元に届く。彼は筆をとり、当時編集次長を務めていたメルキュール社の便箋に礼状をしたためる。日記をつける習慣のためだろうか。いかにも几帳面そうな、小さく良く調った筆跡である<sup>27)</sup> ——

1914年3月12日、パリ

親愛なるポーブ様

今しがた落掌した一書『スタンダールの文学生活』は、あなたのご厚意によるものでしょうか。お名刺が差し挟まれているので、おそらくそうなのでしょう。ご高配に深謝いたします。とりわけお祝い申し上げます。ご高書は愉快です。この中身は、スタンダリアンをしてお顔立ちを思い浮かべてご肖像を描かしめ、さらには昔も今もあなたがずっとそうであるように、忍耐強く、マニアックかつ熱狂的で、じつに愛想のいい蒐集家であると言わしめるのに、多少とも役立つことでしょう。なんと有り難いこと！ 私がその文芸批評をすとしたら、それはもうとっくに出来あがっているのですから。とはいえ、あなたのご意図をお隠しになっているばかりか、じつのところかなりの虚栄心をお持ちなのではないかと疑念を抱いております。賭けてもよろしいのですが、ご高書の最初の一冊が届けられて、それを手にされたとき、あなたは姿見の前で少々反っくり返られたに相違ありません。これまで私はたびたびこう申し上げてきました。「あなたは後世に名を残される」、と。パール全集のこの素晴らしい版本のなかに芳名がくわわったからには、もはやかかる榮譽は確約されました。もっとも、数々のお仕事と入念さによって、そして類例のない人物への称賛の念によって、あなたはすでにこの名誉を手にはされていたのですが。

ご高書のなかに記された私へのお世辞に対しては、お礼を申し上げるわけにはまいりません。あなたはそこにおいて、私には分かち合うことのできない偏執を満足させていらっしやいます。それに協力しているように見られたくはありません。

いずれまたそのうち、日曜日にでもお伺いするつもりです。では、奥様とお子様方によろしくお伝えください。

P・レオトー

虚栄心を諷刺してやまなかったスタンダール、その文学の賛美者ポーブにとって

てこの好意を装ったレオトーの辛辣な指摘はたいそう骨身に応えたにちがいない。シャンピオンに宛てた同日付の礼状のなかでレオトーは同様の表現をもちいてポープを讃えているが<sup>28)</sup>、エディット・シルヴによれば彼の褒め言葉の数々はじつは研究者ポープの業績を軽んじるものであり、総じて「正々堂々と後代に名を残せない批評家のイメージ」をあたえているという<sup>29)</sup>。

遺恨の根はかくも深いのだが、その由来の謎を解く鍵はこのポープ宛礼状の第2節、とくに「私には分かち合うことのできない偏執」というくだりにありそうだ。いうまでもなくレオトーがここで嘸みついているのは、ピエール・ラセール、アンドレ・シュアレス、グールモンらと並ぶスタンダール研究隆盛の立役者としてレオトーの名が掲げられた序文であろう。注目すべきことにポープはこの序文で〈スタンダール＝クラブ〉にさも実体があるかのように見せかけているのだ<sup>30)</sup>。そればかりではない。ポープは自身が1909年に発表した一篇「ル・スタンダール＝クラブの補遺」を自著に収録しているのだが、これはレオトーやグールモンの紹介とは別個に彼らの偽名、すなわちモーリス・ボワサールとコフを実在するメンバーとして扱い、当時グールモンを不快にさせたいわくつきの戯文である<sup>31)</sup>。かかるポープの意図と、〈スタンダール＝クラブ〉の会員一覧を1914年4月に公表するシャンピオンの狙いとを結び合わせるならば、礼状のなかでレオトーが「偏執」と呼ぶものとは、シャンピオン版『スタンダール全集』の宣伝のために〈スタンダール＝クラブ〉という神話の威光を利用しようとする企みだと思ひ当たるであろう。「幸福な少数者」の理念にあくまでも忠実に、「スタンダリアンは各人がそれぞれの小さなクラブをもつ」と謳ったレオトーの傑作「ル・スタンダール＝クラブ」が<sup>32)</sup>、ポープの著書にその居場所を失った理由について、もはやこれ以上縷言するまでもあるまい。

## 註

- 1) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E. SLATKINE, Paris: Libr. Honoré Champion, 6 vol., 1997-99, t. VI, p. 405.
- 2) Voir Victor DEL LITTO, «Stendhal, Grenoble et les Grenoblois: 1842-1920», *Stendhal Club*, n° 98, 15 janvier 1983, p. 133; voir aussi V. DEL LITTO, «Voici cent

- ans : la publication des grands inédits », *ibid.*, n° 118, 15 janvier 1988, pp. 100-105.
- 3) Voir Victor DEL LITTO, « Avant-propos : Petite histoire du Stendhal-Club », in *Le temps du Stendhal-Club (1880-1920)*. Textes réunis par Philippe BERTHIER et Gérard RANNAUD, Toulouse : Presses Universitaires du Mirail, 1994, pp. 13-22 ; voir également Emile HENRIOT, « Le Stendhal-Club », *Le Divan*, n° 49, juin 1914, pp. 210-220.
  - 4) Voir Philippe BERTHIER, « Stendhalisme », in *Dictionnaire de Stendhal*. Publié sous la direction de Yves ANSEL, Philippe BERTHIER et Michael NERLICH, Paris : Libr. Honoré Champion, 2003, pp. 687-688.
  - 5) HENRIOT, *art. cité*, p. 217.
  - 6) Jacques ROBICHEZ, « Léautaud et Stendhal », *Stendhal Club*, n° 138, 15 janvier 1993, pp. 170-174.
  - 7) Voir P.-J. RICHARD, « Stendhal “for ever” : Adolphe Paupe », *Stendhal Club*, n° 25, 15 octobre 1964, pp. 15-20.
  - 8) Armand WALLON, « Quatre “premiers” stendhaliens », *Stendhal Club*, n° 138, 15 janvier 1993, pp. 105-107.
  - 9) Voir DEL LITTO, « Avant-propos : Petite histoire du Stendhal-Club », *art. cité*, p. 19.
  - 10) DEL LITTO, « Voici cent ans : la publication des grands inédits », *art. cité*, p. 105.
  - 11) Jacques HOUBERT, « Paupe, Adolphe », in *Dictionnaire de Stendhal, op. cit.*, p. 520.
  - 12) Paul LÉAUTAUD, *Correspondance générale 1878-1956*, recueillie par Marie DORMOY, Paris : Flammarion, 1972, pp. 171-172. デル・リットは、この手紙の調子が「あまりにもとげとげしかったので、まさに善良で素朴な人物だった哀れなポーブは当惑した」はずと述べている (Victor DEL LITTO, « Trois lettres inédites sur Stendhal », *Stendhal Club*, n° 12, 15 juillet 1961, p. 147)。
  - 13) Paul LÉAUTAUD, *Journal littéraire*, Paris : Mercure de France, nouvelle éd. en 4 vol., 1986, t. I, pp. 197-198.
  - 14) Voir *ibid.*, t. II, p. 1689.
  - 15) Voir *ibid.*, t. I, p. 198. 当時レオトーがストリヤンスキーとは面識がなかったことが1905年9月19日付の日記から推察できる。
  - 16) Voir *ibid.*, t. I, pp. 243-244.
  - 17) Victor DEL LITTO, « Documents inédits pour servir à l'histoire du stendhalisme. I - Paul Léautaud. II - Jean de Mitty », *Stendhal Club*, n° 101, 15 octobre 1983, pp. 6-7.
  - 18) Voir LÉAUTAUD, *Correspondance générale, op. cit.*, pp. 398, 403, 404 et 405.
  - 19) Voir LÉAUTAUD, *Journal littéraire, op. cit.*, t. I, p. 240.
  - 20) Voir LÉAUTAUD, *Correspondance générale, op. cit.*, pp. 369, 370 et 377.
  - 21) Voir *ibid.*, pp. 378 et 382. ちなみにヴァレットの返事は芳しくなかった。



- 22) Victor DEL LITTO, «Textes et documents. 1. Trois billets inédits de Paul Léautaud. 2. Les débuts stendhaliens d'Henri Martineau (Documents inédits)», *Stendhal Club*, n° 119, 15 avril 1988, p. 189.
- 23) Voir *idem*.
- 24) デル・リットは、レオトーがポーブの著書を論文集と勘違いしたことが齟齬の原因ではないかと推測している (voir *ibid.*, p. 190)。だが、そもそもこの話をもちかけたのがポーブのほうであったこと、しかも原稿送付から1年が経過していることを考えあわせるならば、ポーブの方針転換にはべつの理由があったと考えられる。
- 25) この事件以後、レオトーがポーブに宛てた手紙は、1914年1月11日付と1915年7月26日付の2通が確認されるのみ (voir DEL LITTO, «Documents inédits pour servir à l'histoire du stendhalisme», *art. cité*, p. 12; voir aussi LÉAUTAUD, *Correspondance générale, op. cit.*, pp. 448-449)。このうち後者は、ポーブの息子アンドレの訃報に接してのお悔やみ状である。『文学日記』のほうでは、目の手術のため入院したポーブを見舞ったとある、1913年3月28日付の記述以降、ポーブのことが書き留められるのは1915年8月7日付の日記であり、レオトーからお悔やみの言葉がないことに驚くポーブの手紙が2週間前に届いたと記されている (voir LÉAUTAUD, *Correspondance générale, op. cit.*, pp. 958-959)。
- 26) Voir *ibid.*, p. 377.
- 27) なお、本書簡のオリジナルは個人蔵である。
- 28) Voir LÉAUTAUD, *Correspondance générale, op. cit.*, p. 435.
- 29) Édith SILVE, *Paul Léautaud et le Mercure de France. Chronique publique et privée 1914-1941*, Paris: Mercure de France, 1985, pp. 380-381.
- 30) Voir Adolphe PAUPE, *La vie littéraire de Stendhal*, Paris: Libr. Ancienne Honoré Champion, 1914, p. VII.
- 31) Voir *ibid.*, pp. 182-185; voir aussi DEL LITTO, «Documents inédits pour servir à l'histoire du stendhalisme», *art. cité*, p. 7.
- 32) Paul LÉAUTAUD, «Le Stendhal-Club», *L'Ermitage*, 16<sup>e</sup> année, t. I, n° 3, 15 mars 1905, p. 151.